



白い抽斗と人形棚と夏



人形画家R

白い抽斗と人形棚と夏

<http://p.booklog.jp/book/47756>

著者 : doll-painter

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/doll-painter/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47756>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47756>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

人形の絵

人形の絵を描いています。

ときには、果物や風景の絵を描きます。

そして日常の一情景の中の女性像も描きますが、
無機質になりすぎるときが多いです。

それから少女や踊り子も描きます。

少女と人形はよく似ているでしょう？

とよく尋ねられますが、

それが全然違っていて難しい。

おもに人形を描いています。

指輪とブローチ

身につける装身具なら指輪が好きです。

手を翳すといつでもその小さな世界を見入ることができるから。

列車に乗っているとき、

喫茶店で一人座っているとき。

このようなことをいつだったかどなた様かにお話ししました。

その時はっとしました。

ああ、それならばこれからひと様にお会いするときは

ブローチをつけてみましょうか。

そうすれば、きっと

わたしのつまらないお喋りの間も、

その方は小さな世界を見て

少しはなごまれるでしょうから。

少女と人形

少女と人形の表情の表現に戸惑っています。

そこで最近また、少女と人形を同じ画の中に描いてみえています。

無表情の人形のほうが笑っているように見えるほどに

少し大きい姉少女は無愛想でした。

パリ 移動祝祭日

かのアーネスト・ヘミングウェイは言ったといひます。

パリは移動祝祭日だと。あの年の夏、こぞってみんながパリへ行った年、わたしはホノルルへ行きました。

ひと夏を終えると、みんなはどこか主義めいたことを持つようになっていて、日焼けた肌のわたしはクラスで浮いていました。

それでもそのうち、わたしの肌の色は戻り、みんなが次の試験に没頭するころには、また元に戻りました。

そのあとも結局、パリへは行かずじまいです。

新しい人形



新しい人形を買いました。

わたしは人形に名前をつけません。

他の人より、もしかしたら人形を擬人化しないのかもしれませんが。

それでも、人形に挨拶したり、少し話しかけたりすることがあります。

ただただもの言わず、黙って聞いてくれているのです。

わたしの人形

おおきい人形。

ちいさい人形。

とっても大きい人形。

たいそう小さい人形。

お人形さんを持っている人形。

お人形さんを持っている人形、ってというのは

とても微笑ましい構図です。

みんなこういうのが好きなので、こういう人形は

よく売られているのです。

わたしもこういう人形をいくらか持っています。

その小さなお人形さんは人形のもの。

でもでも。

わたしの人形棚には人形がいっぱい。

ぎゅうぎゅうなのです。

だから大きい人形のお膝の上には

小さな人形がいっぱいのっています。

みんなが聞きます。

「このお人形さんはこの人形のお人形さんなの？」

慌ててわたしは答えます。

「違う。違う。この小さな人形はわたしの人形よ。」

するとみんな、くすくす笑うのです。

大切なことなのです。

夏のような春

夏のような風が吹いている春の日には、きまってあの日のことを思い出します。

わたしは15歳。あの子は同級生でした。

いつもいっしょに登校する朝。

その前の日に仲たがいた理由は何であったのか、

もう一向に思い出せないけれど、春にもかかわらずあつい日で、

なま暖かい風が前髪をはさはさと持ち上げて、

ふたりのあいだの重苦しい空気とあいまって、

嫌な気分でした。

会話のない二人の間には、あつさにうんざりしたかのような、

あるいは会話の代わりに思いつく行為であるかのような、

溜め息と「あつい。」という言葉ばかりが、繰り返えし漏れてました。

とるにたりない些細な記憶です。

サークル・ドット・ブリュ人形



まだ春は遠いように思えた、さむい早春のころに
絹の織物で仕立て上げられた豪華な衣裳をまとった
サークル・ドット・ブリュ*人形の絵を描き始めました。

特徴的な口をした顔は一気に描き上げることができたのですが、
お腹あたりや足元のほうはぜんぜん進まずに、いまま未完成です。
それとは別の、無骨ではだかんぼうの二体の小さい人形に描く興味が
移ってしまいました。
そして、そちらはブリュ人形を追い抜かして完成してしまいました。

移り気の理由に考えてみました。
もしかしたら、ブリュ人形がはいているスカートの
あの紅梅色をまぜたような赤い色に
わたしは圧倒されたからかもしれません。
その強烈な赤色に打ち勝ち解釈することはおろか、
まるでブリュ人形が意志をもって
描いているわたしを淘汰したようでさえありました。

とても魅惑的で熱帯の花のような独特の赤色なのです。
そんな色のスカートを身に付けているブリュ人形です。
幼い少女人形の愛らしい表情にもかかわらず、惑わされてしまいました。

それでも、このようなことを記すことができたのは、
昨日ぐらいから、今度はその赤をうまくとらえはじめたからです。
もう少し気が満ちれば、完成は間近だと思います。
夏もまもなくやってきます。

*サークル・ドット・ブリュ・・・アンティークドールで代表的なブリュ工房の人形の種類の一つ
。

メリージェーン



人形はよくメリージェーンの靴を履いています。

メリージェーンとは靴の種類のことです。

いつのころからかこの言葉をわたしはよく使っていたのですが、通じないことが多く、このごろは使わないようになりました。

ストラップシューズのことで、甲の部分にベルトがあるような感じの靴の種類だと、わたしはとらえているのですが、厳密なことはわかりません。

人形はよくこの種類の靴を履いています。

少女の定番靴なので、ありうることでしょう。

そして、わたしも少女のころはよく履いていました。

たとえば黒色のエナメルなら発表会や演奏会、よいレストランでの食事のときでした。

透かし模様のある白色は夏の旅行の行き帰りと夏季の特別なお出かけでした。

スエードのこげ茶色はお友達のお家へのお呼ばれの日とか、親戚のお家に行くときにちょっと気取った普段着にちょうどよろしいものでした。

二本のベルトがついた紺色の特別に美しいものは、

やはり紺色の、別珍のワンピースか夏用の上下もの、

いずれにしても着物のように「おおよそゆき」と呼んでいた洋服とあわせるものと決まっていました。

朽ち果てることもなく、残り続けていました。

ひとことに少女といいましても、日ごと成長するころですから、

ある日整理すると、大きな人形が履いていてもおかしくないような

小さなメリージェーンから、なんとか今も履ける少女末期のメリージェーンまで

色とりどりにあって、感嘆と困惑が入り混じった不思議な穴に入ってしまったようでした。

考えあぐねた挙句、捨ててしまうことにしました。

箱に入っているとかさばり、靴だけ並べてみるとたいそうな場所をとったのに、

袋に詰め込むと、驚くほどに小さくなってしまいました。
小さな華奢な靴の集合体はほんとうに小さくて、少し悲しく、
そしてひとり、小さくひとつ笑ってしまいました。

もう十年以上前のことです。
少し動くにあつくて、時折入ってくる風はまだ涼しくて、
今日のような日でした。

今も履いているのです。メリージェーンの靴を。
踵は少し高くなったけれど。

夏至のころ

眠る前に短い小説を読みました。

登場する女性の年齢がきっちり書かれていました。
そうしますと、わたしより年若いですが、
成熟したきっちりとしたひとのように感じました。

読み進めますと、女性は嬉しさのあまり
もうすぐ小躍りしてしまいそうな気持ちと
それを隠そうとする行動が書かれていて、
とても可愛らしく思いました。

もちろんのこと、その女性の可愛らしさを
表しているのですが、
その文も可愛らしく、同じところを繰り返し読みました。

たとえば、もしこの書き手さんが、夏至のころの
深夜から早朝に移るとき、
青白くみえる赤白い肌の人形たちを説明するの
どのように書くのだろうかと考えました。

厳しかった習作の授業のようでした。

とある人

ある名前が書いてある手紙を捨て去ってしまおうかどうか躊躇していました。

今それを捨て去ればきっと
この先その人を思い出すことはきっとないでしょう。
うるさい雨降る日にその手紙を見つけるまで忘れていたのですから。

躊躇しましたのは、
もし、もしも思い出すことがあったとき、
そしてたとえば、ひょっとしたことで思いだしたくなったとき、
その名前を正確に思いだせずに困るかしら、と思ったからです。

もうその名前を思い出す手立てはその手紙以外ほかはなにもありません。
何日も雨が続けてから晴れた日の午後、
その手紙を捨て去ろうとしたときに、その名前を初めてしっかり読み上げたぐらいなのですから。

いま捨て去れば
明日はまだその名前を思い出すことができても、
きっと来年には思いだせないと思うのです。

だから躊躇したのです。

さよなら、なぜかしら、まだ年端もいかない不機嫌な少女におべっか笑いをした人。

夏の無音時間

夏はよいと思います。

よいと思うところのひとつは、午後の無音時間です。

午前中ずっと開け放してあった裏庭の扉をバタムと閉め、
お昼過ぎにガラス食器をカタリと洗った
後のことです。

ハタリと洗濯物が揺れだすと無音時間がおわります。

夏服

とてもお気に入りの夏服がありました。

まるで誂えたかのようにしっくりなじむ夏服です。
その夏服をまとっていると、みながほめてくれます。
こんなことなら、色違いで売られていたあの青いほうも
いただいおけばよかったと思いました。

その夏服を着るたびに、あの青いほうの夏服のことを思いました。
次の夏もそう思いました。
またその次の夏もそう思いました。

そしてその次の夏には
もうそのようには思いませんでした。

素敵な人

怖くて長い間、開けられない書棚がありました。

いつまでもこのままにはしておけません。

書棚を開けました。軋むようなぎこちない音をたてるかしらと思いましたが、

まるで毎日、そして先ほど開けたところかのように扉は開きました。

その本たちを何も考えずに、いくつもの紙袋に詰め込み始めました。

もう読む必要もないのですから、消えてしまえばいいのですから。

どの本も開くつもりはなかったのに、どの本も読むつもりはなかったのに。

それなのに私はある古い本を読み返してしまいました。

お話はだいたい覚えていました。

そこに出てくる素敵な人のことを忘れていました。

私はそこに出てくる、そのような女性になりたかったのです。

その素敵な人に似ているところが一つもありません。まるでありません。

ふわふわしたブラウスと

細い藍色で別珍のリボンも紙袋に入れました。

この可愛らしいお花柄の舶来菓子の小箱ももういらないでしょう。